



山崎さんが父を供養した「おもいで碑」と同じ、清水焼で作った地藏像の納骨オブジェ



漆塗りの納骨ペンダント「かぐや姫」。女性客の声をもとに、旅行に持ち歩けることをコンセプトに作成



分骨用の、真鍮製ミニ骨壺。内部の納骨袋に骨を納める。希望に応じて壺の外表面に文字を掘ることも可能



写真焼き付けタイプのオブジェ「笑顔の墓碑」。内部に真鍮製骨壺がある。思い出深い写真と共に供養できる

供養の対象にし、いつでも身近に感じることはできないかと考えました。当時、そうしたサービスはなく、ならば自分で作ってしまおうと思いついたのです」
そう話すのは、「手元供養」という新しいスタイルを提唱し、京都を拠点に手元供養品の開発、販売を行う、『博國屋』店主である山崎譲二さん。2002年、仲間と共に父の「おもいで碑」を作成。清水焼の地藏像の中に、父の骨の一部を納骨した。同時に、自分と同じ考えを持つ人も多いはずと、同年に博國屋を設立。そして、自ら考え出した供養に『手元供養』と名付けた。

「供養には故人の成仏を願う気持ちだけでなく、遺された人にとっても、故人に感謝し、偲ぶことで、故人のぬくもりを感じて癒されるという意味もありです。ペンダントにして身に付けたり、骨壺を居間に置くなどすることで、故人をより身近に感じられるはず。生きる者と故人をつなぐグリーンフケアとして、多くの人が手元供養を行うようになりました」
手元供養を始めた際、まず神戸の生協系葬儀サービス事業者が関心を示したという。神戸には阪神・淡路大震災で家族を亡くした遺族が多数いた。被害者の遺骨を身近に供養したいという強い思いから、手元供養は広がっていったのだ。

手元供養品には、遺骨を納骨するタイプと、遺骨を加工して作るタイプがある。さらに外観も、オブジェタイプ、ペンダントタイプ、ミニ骨壺など様々だ。山崎さんが作成する手元供養品は、使用するものはあくまで遺骨の一部で、残る遺骨はお墓に入れる遺族もいれば、散骨や樹木葬など自然葬とする遺族もいる。
「手元供養に固定概念はありません。弔う人の数だけ、自分らしい弔い方は存在します」と山崎さん。自分らしい供養のあり方を、自ら考え形にできる時代が来たのだ。



手元供養の創始者、山崎譲二さんは、考え方を同じくする仲間と共に05年、NPO手元供養供養会を設立。伝統やしきたりにとらわれない、自由な弔い方、供養のあり方を提案し続けている

故人を偲び、供養する。それは葬儀をはじめとした儀式の時ばかりでなく、墓や仏壇等の前で手を合わせ、故人を思い出すという日々の営みの中でも繰り返されてきた。古くより日本人が受け継いできた、伝統文化でもある。
その供養の「対象物」は従来、専ら故人が眠る墓と、位牌であった。石塔の墓が建立され、また、故人を祀る位牌が一般世帯にも広まったのは、江戸時代と言われる。以降、火葬した故人の遺骨を墓に納め、先祖代々、墓と位牌を継承していくという供養のスタイルが定着した。しかしこの「常識」が今、大きく変化

しようとしている。
まず、少子化・核家族化によって、墓の継承が難しくなってきた。そして後継者となる子どもがいない、あるいは子どもが都市に定住し、墓が「無縁墓」となるケースが増えている。
その一方で、従来の「墓・位牌」とは異なる形で、故人を供養したいという考えも着実に広まっている。しきたりや形式にとらわれず、自分らしい方法で故人と接していきたい。あるいは自分らしい方法で、自らの死後の身の振り方を決めたい、という発想だ。
そうした中、墓や位牌に代わる供養の

対象として今、注目されているのが、「手元供養品」である。
「素の心」で故人を偲ぶ、それは大災害が契機だった
「私自身、好きだった父を弔うにあたって、宗教色の強い位牌での供養に違和感を覚えていました。あまりにも形式的なように感じたのです。遺骨そのものを

大切な人を、いつまでも忘れずにいたい。残された遺族の自然な気持ちは、供養という形で表現される。そのスタイルは、より自由であっていい、より個人的であっていい、そう考える人々が増えていく。故人の遺骨を様々な形で手元に残す、これが「手元供養」という新しい弔いの方法だ。

遺された人が癒される、心の拠り所として

博國屋

